

## ツバメの子育て



今年もツバメの姿を見かけるようになりました。

ツバメは春に東南アジアから渡ってきて、4～7月に卵を産み育て、7月後半から10月ころ南に帰る渡り鳥です。

1日に1個、全部で4～6個の卵を産み、抱卵は18日ほど、ふ化後も1週間ほどヒナを保温します。ほとんどメスが抱卵、オスは外敵から守りますが、メスがエサを食べたり水を飲んだりするときは交代するようです。

ヒナは卵から孵ってから3週間ほどで飛べるようになりますが、さらに自分でエサをとれるようになるまで1～2週間は、親がエサを与えます。

エサは朝6時から夜7時まで、1時間に20～30回、1日に300回以上与えるようです。

ヒナは、目が開かない時から振動で親がエサを運んできたのを感じし、一斉に鳴きます。親は基本的に端にいる1番早く鳴いたヒナに与えるのですが、お腹が足りたヒナは奥に下がるので、うまく均等にエサをもらえるようです。

巣立ちした幼鳥たちは、渡りまで水辺のアシ原や大きな樹木などで集団生活をします。親鳥は1回目の子育てが終わったあと余裕があると2回目の子育てをしますが、2回目の子育てを終わる夏には親鳥たちも集団に加わります。秋には数千～数万羽もの大群になり、親鳥から先に渡り始め、幼鳥は体力がつくのを待って、遅くとも10月頃には飛び立ちます。

時々巣から落ちたり、うまく飛べないで地面にいるヒナがいますが、巣に戻すか、猫やカラスに襲われない安全な場所に移すかして、あとは自然な成り行きに任せます。野生の生き物を人間が育てるのは難しい上に、親から生き延びる術を学習する必要があるので、ヒナを連れて帰るのはやめましょう。かわいそうなのですが、それが自然の摂理なのです。

人間の子育ても、適切な保護と過保護の線引きが難しいですね。

